

タイトル	平安貴族の山里（山莊）について：その2 山里の自然美・音楽・田舎暮らし・閑居・恋・修道
著者	小野，恭平；ONO, Kyohei
引用	北海学園大学学園論集(168)：1-12
発行日	2016-06-25

平安貴族の山里（山莊）について

—— その2 山里の自然美・音楽・田舎暮らし・閑居・恋・修道 ——

小 野 恭 平

目次

その1 山里のイメージ・風景・四季・眺望（166号）

その2 山里の自然美・音楽・田舎暮らし・閑居・恋・修道（本号）

その3 山里の建築と庭

はじめに

山里は平安貴族が京の郊外に見出した遊びや隠遁のための場所である。それは日本庭園の原郷の一つであり、後世の草庵風茶室の源流の一つでもある。本稿は前稿¹⁾に続き、平安時代の山里の魅力が文学作品を資料としながら粗描したものである。

6. 自 然 美

あちこち出歩くことのない都の貴族にとって、山里へ出かけることは大きな愉しみだった。清少納言は賀茂へ出かけた時の興奮を次のように述べている。

・五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいとあおく見えわたりたるに、上はつれなくて、草生ひ茂りたるを、ながながとたゞまに行けば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などのあゆむに走りあがりたる、いとをかし。左右にある垣にある、ものの枝などの、車の屋形などにさし入るを、いそぎとらへて折らんとするほどに、ふと過ぎてはづれたるこそ、いとくちをしけれ。蓬の、車におしひしがれたりけるが、輪の廻りたるに、近ううちかかへたるもをかし。（枕草子、206段）

久々の梅雨の晴れ間に出かけたのだろう、澁んだ空気の室内から明るく広々とした空間へ出た解放感が「をかし」の繰り返しによって伝わってくる。

山里は空間だけでなくその自然も「をかし」かった。

・二十日の月、遥かに澄みて、海の面、おも白く見えわたるに、霜のいとしちたく置きて、松原も色まがひて、よろづの事そぞろ寒く、おもしろさもあはれさも立添ひたり、（中略）御門より外の物見、をさをさし給はず。まして、かく宮この外のありきは、まだならひ給はねば、めづらしく、をかしくおぼさる。（源氏物語、若菜）

- ・はるばると霞みわたれる空に、散る桜あれば今は開けそむるなど、色々見わたさるゝに、川ぞひ柳の起き臥しなびく水影など、おろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ人は、いとめづらしく見捨てがたしとおぼさる。(源氏物語、椎本)

「めづらし」とは今まで見たことがないものを見聞きしたときに感じる新鮮な驚き²⁾と賛美の気持ち³⁾を表わす。上の例は紫の上が初めて住吉を訪れ、月光に白々と照らされた海面や霜の置く松原を見て「めづらしく、をかしく」思った例。後者は匂宮が春たけなわの宇治を訪れ、山の桜と川辺の柳が織りなす景色に「めづらしく、見捨てがたし」と感嘆した例である。いずれの風景も屏風絵などでは見たことがあっただろうが、実際に見るのは初めてで、その「めづらしさ」に魅了されている⁴⁾。

山里の自然や風景が「めづらし」かったのは、そこに都とは異質な時間が流れていたからでもある。

- ・三月のつごもりなれば、京の花盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするまゝに、霞のたゝずまひもをかしう見ゆれば、かゝるありさまも(注:「ありきも」)かならひ給はず、所狭き御身にて、めづらしうおぼされけり(源氏物語、若紫)
- ・七月ばかりになりけり。都にはまだ入りたゝぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、榎の山辺もわづかに色づきて、猶たづね来たるに、をかしうめづらしうおぼゆるを(源氏物語、椎本)

前者は山深く入って行くにつれ、季節外れの桜が咲き誇り、霞が趣深く漂う北山の眺め。後者はまだ秋とも言えない季節なのに冷ややかな風が吹き、木の葉が色づく宇治の風景である。山里はどこか都とは異なる雰囲気や漂う異郷のようだった。

だから貴族たちは引き付けられ、都へ帰るのを忘れた。

- ・山里の花のにほひを尋ねつつ春は都の屋戸も忘れぬ(風情集、公重)
- ・卯の花に咲きこめられて山里に恋し都も忘れにけり(道済集)
- ・人わるくつれづれに思さるれば、秋の野も見たまひがてら、雲林院に参うで給へり。(中略)紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野の、いとなまめきたるなど見給ひて、故郷も忘れぬべく思さる。(源氏物語、賢木)

都だけでなく世をも忘れた。

- ・右大将殿、桂におもしろき所に、大いなる殿づくりて、花盛、紅葉盛などにもものし給ひて、心やり給ふ。花の盛りなれば、日頃、仲忠の母北の方を率ておはして、心やり遊び給ふ。「あやしく世の中忘れられ、心ゆく所にこそありけれ。この春夏こゝに過ぐさん」とて、ものし給ふに、花の色をつくして咲きまじり、水は絲の乱れたるやうに流れ入りて、いと面白し。(宇津保物語、梅の花笠)

「心やる」とは気晴らしをすること、「心ゆく」とは気がかりなことがなくなり、心が落ち着くことである。様々な花が咲き誇り、清らかな水が流れる山荘で遊んでいると、世の憂きことを忘れ

てしまい、心が落ち着くというのである。

『蜻蛉日記』の作者も気晴らしに賀茂に出かけた時、次のように述べている。

・いつもめづらしき心ちする所なれば、今日も心のばはる心ちす。（蜻蛉物語、天禄三年）

「心のばはる」とは心が伸びやかになることである。めづらしいものを見ていると怒りや悲しみで頑なになった心が開放されるからであろう、心が伸び広がっていくようだという。次の例も病んだ源氏が北山を訪れ、聖から加持を受けた翌朝、たち籠める春霞の中を逍遙するうちに悩ましさを解放される場面である。

・明け行く空はいといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなうさへづりあひたり。名も知らぬ
木草の花ども色々に散りまじり、錦をしけると見ゆるに、鹿のたゝずみありくもめづらしく
見給ふに、なやましさも紛れはてぬ。（源氏物語、若紫）

山鳥があちこちで囀り、名も知らぬ花々が錦を広げたように咲き乱れ、鹿がたたずみ歩く。源氏は現実とも思えない、この絵のような風景の中を逍遙しているうちに悩ましさも消え去ってしまったという。

山里はその開放的な空間が見る人の心を明るく解放し、自然の「めづらしさ」が世の憂きことを忘れさせ、悩ましさを解放してくれたのであった。

7. 音楽

山里では野外で宴が愉しまれた。

・今日は猶、桂殿にとて、そなたざまにおはしましぬ。にはかなる御あるじとさわぎて、鶺鴒ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。野に泊りぬる君達、小鳥しるしばかり引きつけさせたる荻の枝など苞にして参れり。大御酒あまたゝびずむ流れて、川のわたりあやふげなれば（注：「なれど」か）⁵⁾、酔ひにまぎれておはしまし暮らしつ。をのをの絶句など作りわたして、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊び始まりて、いと今めかし。弾物、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手のかぎりして、折にあひたる調子吹きたつるほど、川風ふきはせておもしろきに、月高くさしあがり、よろづの事澄める夜の、やゝ更くる程に、殿上人四五人ばかり連れてまいれり。（源氏物語、松風）

鷹狩で野に泊っていた君達や殿上人たちが参集し、宴が賑やかに愉しまれている。場所は鶺鴒どもの声が聞こえているから川原の近くであろう。ちなみに桂川や宇治川辺の山莊は川に面して建てられたものが多く、例えば『蜻蛉日記』の作者が天禄二年夏に訪れた藤原師氏の山莊は鶺鴒漁がよく見える水辺に建ち、川風が吹き抜けて頭痛がするほどだったというし、『源氏物語』の宇治の八宮の山莊の場合には川から直接廊へ上がれるようになっていた。だからこの桂殿もおそらく川辺に建てられており、川原をそのまま庭とするような造りになっていただろう。そしてそのような場所での宴だから堅苦しい席順など抜きにした気の置けない開放的な宴だったであろう。

さて宴では音楽が遊びの主役だったが（遊びとは狭義には音楽を意味する）、野外では楽の音が

風の音や水の音と共鳴するからか、都より面白く聞こえたという。

- ・所がらに、ものの音まさりて、おもしろう聞ゆる事かぎりなし。(夜の寝覚、巻5、亀山の山荘)
- ・かう世離れたる所は、水の音ももてはやして、物の音澄みまさる心地して(源氏物語、椎本、夕霧の山荘)

しかも楽の音は夜になると一層趣を深めた。清少納言も「あそびは夜。人の顔見えぬほど」(枕草子、200段)と言っている。暗がりの中では視覚が制限され、逆に想像力が解放されるからであろう。じっさい夜の音楽は聞く者を不思議な世界に誘ってくれた。例えば『狭衣物語』では狭衣が笛を吹くと空の様子が一変し、星の光が月のように輝きわたり、稲妻が走り、紫の雲に乗った天人が天下って来たというし、『夜の寝覚』物語では極楽浄土の面影さえ見せてくれたという。

- ・世にある博士ども、にはかに召して、文つくらせ給う。夜に入ぬれど、「よるさへ見よ」と月の光も心をそへて、くまなく澄めるに、ある限り乱れ遊び、夜もすがら文作り、歌よみて、暁がたに講ぜらるる。(中略)朝ぼらけの霧のたえまに風のおほへる紅葉の色々と見えて、いまひと返あそばれたる、おもしろさかぎりなし。極楽などいふらん所も、かくとぞおぼえたる。(夜の寝覚、巻5、亀山での宴)

「遊び」とは「日常的生活から別の世界に身心を解放し、その中で熱中もしくは陶醉すること」(岩波 古語辞典)である。あるいは「忘我・熱中・陶醉・愉悦といった気分を伴う、日々の本分を離れた行為⁶⁾」をさす。つまり「日常生活とは異なる非日常的空間あるいは時間、いわば異界に歩み入ること」である⁷⁾。その意味で山里の夜の音楽は人を異界へ誘ってくれる典型的な遊びだったといえるであろう。

なお上に引用した『夜の寝覚』の作者は十三歳の時、夜の山中で聞いた歌声に不思議な感動を覚えたことがあった。作者が父の任地であった東国から京に帰る途中のことである。一行は足柄山で野宿することになった。辺りは「いとおそろしげ」に樹々が生い茂り、月のない夜だったので漆黒の闇がひろがっていた。そこへ何処からともなく三人の女が現れた。松明の灯りを近づけてみると、色白く、ひたい髪の美しい遊女(遊び)だった。女たちは空に澄み昇るような声で歌った後、再び深い闇の中へと消えていったという。後に物語作家となった作者がこの夜のことをいつまでも覚えていたのも、闇の中から現れた遊女たちの遊びに、これまで体験してきた日常とは異なるもう一つの世界を垣間見たからであつたろう。

8. 田舎暮らし

山里では春の若菜摘みや小松引き、秋の山菜採りや野外炊飯など、自然の中での遊びが愉しまれた。

- ・春立ちて子の日になればうちむれていづれの人か野辺に来ざらん(貫之集)
- ・春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ(貫之集)

- ・紅葉の林に御座敷きて皆み給ひぬ。（中略）山の法師ばら、童部出して、をかしき枯木拾はせて、御前に銀の鏡など取りいでて、お物炊がせ、お前の朽木に生ひたる茸ども薬物にさせ、苦竹など調じて、銀の金椀に入れつゝ参れば、君達興じつゝめしそへつゝ参れり。（宇津保物語、国譲・下）

室内生活を専らとしながら変化のない日常を繰り返す都の貴族たちにとって、野遊びは、彼らの自閉的で停滞した心を浮き立たせ、解き放ってくれる魅力的な遊びであった。

山里では鷹狩や鵜飼漁の他、田植や稲刈などの農作業も愉しまれた。清少納言は『枕草子』209、210段で農家の女たちが歌を唄いながら田植をする様を見て「をかし」と言い、稲刈を「せまほしげに見ゆる」と述べている。また『小侍従集』には実際に門田の鳴子を引いて興じあったことが次のように詠まれている。

- ・中将隆房八条の家⁸⁾に内の女房あまた見にゆきたるに、門田のおもしろくて鳴子かけなどしたり。見遊びて立ちかへり、これより——ほの見つる門田の稲に綱はへてしかいとはずばまたもゆかばや（太皇太后宮侍従）

このように田舎の風俗は都の貴族たちの興味のまとだったから、訪問者に農作業の「物まねび」をして見せることは山里らしい格好の「もてなし」となっていた。

- ・所につけては、かゝることをなむ見るべきとて、稲といふ物とり出て、わかき下衆どもの、きたなげならぬ、そのわたりの家の娘などひきもて来て、五六人してこかせ、又見もしらぬくるべき物、二人してひかせて、歌うたはせなどするを、めづらしくて笑ふ。（枕草子、95段）

『源氏物語』（手習）でも、塞ぎがちな浮舟を慰めるために女たちが「門田の稲刈るとて所につけたる物まねび」をして見せている。

他方、訪問者を田舎らしい食事で供応することも興味あるもてなしだった。例えば須磨に謫居中の源氏は訪ねてきた親友の中将を「ことさら所につけ」た食事でもてなしているし、先に見た『枕草子』95段の高階明順も訪ねて来た清少納言たちを手づから摘んだ蕨で歓待している。

この他、鄙びた山菜や川魚を都の知人に贈ることも風情あることだった。

- ・御寺のかたはら近き林に抜き出でたる筍、そのわたりの山に掘れるところなどの、山里につけてはあはれなれば、たてまつれ給とて、御文こまやかなる端に、春の野山、霞もたどたどしけれど、心ざし深く掘り出でさせて侍るしるしばかりになむ。（源氏物語、横笛、朱雀院から女三宮へ）
- ・鮎一籠、鮠一籠、石斑魚、小鮒入れさせ、荒巻など添へさせて、藤壺の若宮の御許に、手づから、往来月日書きて、せむ立てゝ、御名し給へり。かたはらに「君がため静けき空にすむ魚を今日より見せむ千代の日ごとに」と書きて、すはうせむにして赤き色紙に書きて、瞿麥の花につけたり（宇津保物語、国譲中、仲忠から藤壺の若宮へ）

一方、「物まねび」だけでなく山里人すなわち山賤をまねることも山里らしい遊びの一つだっ

た⁹⁾。『伊勢物語』58段に業平と思しき数寄者が手づから稲刈りをしようとしたのを隣家の女房たちが見て「いみじのすきもののしわざや」といって冷やかす場面がある。男の行為は女たちにとっては物好き以外の何ものでもなかったが、男にとっては田舎に隠遁した躬耕の隠者や山賤を演じる遊びだったと思われる。ちなみに源氏は須磨では調度、碁・双六の盤などを殊更「田舎わざ」にし、衣裳も「ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、ことさらに田舎びもてなし」(須磨)ていたが、これも「いみじう見るに笑まれて清らなり」(須磨)と評価されているように「やつし」であり、山賊を演じる「すき」の遊びだったであろう。

山里の田舎暮らしには京とは異質な別世界に遊ぶ魅力があったようである。

9. 閑 居

山里は「茲地幽閑人事少」(凌雲集, 秋日於友人山莊, 桑原公腹)とか「茅屋幽閑無客至 爰知此地避鄉塵」(本朝無題詩, 余春洛外別業即事, 法性寺入道殿下)のような脱俗・幽閑の地だった。貴族たちはそこで静寂を愉しみ、花月を愛で、詩を賦し、琴・酒を愉しみ、ある時は釣り糸を垂れ、莊氏の一篇を読み、友あれば碁盤を囲うという悠々自適の閑居を愉しんだ。

- ・ 閑は月を浮かぶるに依りて旁く水に臨み 窓は花を愛するが為に近く山に向かふ (中略) 詩を吟じ 酒を酌み 好んで遊ぶ処 餘興未だ殫きずして自ら還ることを忘れたり (本朝無題詩, 山家秋歌, 紀長谷雄)
- ・ 山家の秋の暮は意如何 物に觸れては感懷日を遂ひて多し 處處に詩を賦しては閑かに諷詠し 時時に酔ひに扶けられては獨り狂歌す (本朝無題詩, 秋日山居即事, 三宮)
- ・ 忘老至 計身安 乘閑空把一魚竿 (本朝文粹, 山家晚秋, 紀納言)
- ・ 此夕無他業 莊周第一篇 (管家文草, 灘聲, 菅原道真)
- ・ 數局の囲碁 坐隱を招く 三分の浅酌 忘憂を飲む (管家文草, 山家晚秋, 菅原道真)

もっとも生計は乏しく、住居も粗末な田舎家だった。が、そこには足ることを知り、自然に任せた優遊たる生があった。

- ・ 道ふこと莫かれ幽棲の生計乏しきを 灌園は自らに年を送る媒と作れり (本朝無題詩, 山家春意, 藤原周光)
- ・ 生計は先ず雲外の曉に忘れ 春愁は遠く日の西する天に送たり (本朝無題詩, 春日山家眺望, 藤原周光)
- ・ 東は棲霞觀, 西は雄藏山。中に茅茨, 松柱三間有り。(中略) 食は飽くことに取りて、滋味を求むること勿れ。酒は憂を忘るることに取りて、痛く酔ふことを要めざれ。且く乃が懷を述べ、各爾が志を言へ。秋の燈は夜の深くなるまで話すことを許し、春の枕は日の高くなるまで睡るに任す。或は坐、或は行き、黒きを衝き、明きに徹る。山雲厭はず、澗水情無し。優なる哉、遊なる矣。聊かに吾が残生を送らむ。(本朝文粹, 山亭起請, 前中書王)

要するに山里は俗界の煩わしさとは無縁の清らかな脱俗境、心のままに生きることができる無

何有の郷そのものだった。

- ・一身漂泊して浮名を厭ひ 試みに避る喧喧たる毀誉の聲 秋水冷しく 暮山清し 三間の茅屋残生を送る（中略）門の前は秋の水 後は秋の山 晝日蕭々として眺望閑なり 人到らず路攀じ難し 唯看るは例に随ひて暮雲の還るのみを（本朝文粹，山家秋草，紀長谷雄）
- ・塙塞の上，亀山の傍。柴扉の門，竹編の牆。松に蓋有り，石に床有り。（中略）詩は兩韻 琴は一張。其の包めるは何ぞ，橘の霜に飽ける。彼の摘めるは何ぞ，葵の陽に向かへる。薇一筐，笋一筐。膾一筋，酒一觴。臥しては睡り，起きては彷徨ふ。荷露の氣，桂風の香。王湛よりも癡れ，嵇康よりも慵し。行楽に任せ，坐忘に入る。擯俗の地，無何の郷。心自得し，壽無窮なり。（本朝文粹，遠久良養生方，前中書王）

ところでこうした清らかな脱俗境に閑居する友を訪問することも興味あることだった。特に雪中の閑居を訪う場面は屏風絵でも繰り返し描かれていた。

- ・左京大夫みちまさの七条のいえの障子の絵に，雪いみじう降りたるに，客人の前に来て，馬より下りたてるところ——雪ふかき道にてしりぬ山里はわれより先に人こざりけり（経衡集）
- ・雪ふりたる山家たつぬる所——道もなく雪ふりにけり山里はたゞ山ひこのこたへのみして（道濟集）

一方，迎える側は雪に埋もれた閑寂な風情を見せることを山里らしい「もてなし」としていた。『今鏡』（藤波の上）に次のようなエピソードが紹介されている。

京には珍しく雪が高く降り積もった朝のことである。師実（1042～1101，頼通の三男）は急に俊綱（師実の実弟）の山莊へ出かけることにした。雪中訪友の風流を実践しようとしたのだろうが，日頃から俊綱の山莊自慢を聞かされていたから，急な訪問にどんなもてなし方をするか慌てぶりを見てみようという魂胆もあったかもしれない。訪ねてみると案の定と言うべきか，門は閉ざされたままひっそりと静まりかえっていた。せっかく雪の中を訪ねてきたのにと興ざめだったが，やっと家人が門を開けにきた。なぜすぐに門を開けなかったのかと責めると，雪に踏み跡を付けないようにするため山の方を遠回りしてきましたのでと言う。そこで師実たちは俊綱の心遣いに気付き，感動したという。

ところでこのような閑居を実践するためには隠遁が不可欠だが，我国ではそれを実行する者は稀だった¹⁰⁾。多くの官人たちは「世務の余閑に草堂を排き 琴を鳴らし 榻を置き 酒を觴に盈たせり」（本朝無題詩，夏日桂別業即事，藤原敦光）というように，役所勤めのかたわら暇を見つけては山里へ出かけ，一時の閑居気分を味わうのが関の山だった。次の詩は隠遁への憧れと，それが叶わない嘆きを詠んだものである。

- ・擯俗の幽居 伊洛の濱 昨朝 蹇に策ちて一たび君を尋ねたり 黛は林戸に来たりて孤峰近く 水は溪田に漑ぎて十字に分かつ 蘿逕の旧交は唯月に結ぶのみ 巖扉の新構は雲を彫るに似たり 灌園の生計は宜しく跡を追うべくも 甘んじて官遊に従ひ 久しく文を属る（本朝無題詩，夏日山家即事，藤原周光）

- ・ 截ち行輪に轄して洛陽を出で 白河院の裏に幾たびか相望まん 東籬の菊は老いて秋霜に攀じ 甲宅の果は珍しくして暁霜に拾ふ 峽は写す弾箏の波の激しき響 峰は伝ふ画扇の月の寒き光 日曬れ漸く動く帰璣の思ひ 官途万里の強(ハテ)なるを其奈んせん(本朝無題詩, 夏日山家即事, 藤原明衡)

前の詩は上司の山荘を訪ね、幽居の素晴らしさを称賛しながらそうした閑居のかなわない自身の役人暮らしを嘆いたもの。後者は白河院を訪ねて遊んだ後、都へ帰ろうとするが、役人生活に戻る道がなんとも遠く思われてしょうがないと嘆息したものである。このような状況だったから、閑居といってもそれは隠遁を演じる「遊び」として愉しまれたものであった。例えば高階明順は山荘を訪ねてきた清少納言たちに手づから摘んだ蕨を中国風の懸盤に並べてすすめているが(枕草子, 95段)、それは首陽山の蕨で飢えをしのいだ伯夷・叔斉を演じたものである。清少納言たちはその隠遁遊びに参加させられたわけである。また源氏は須磨の家を「石階松柱竹編牆」という「いはむ方なく唐めき」たる造りにし、「から国に名を残したる人よりも行くへ知られぬ家居をやせむ」(須磨)と隠遁を詠んでいるが、これも自身を中国の隠者に擬えたものであったろう。

10. 恋

山里は恋の舞台だった。『源氏物語』の嵯峨、小野、宇治などがそうだったし、屏風絵でも山里の恋が繰り返し描かれていた。

- ・ 梅の花見たよりに、もの言ひそめたる女に男 — 見し人にまたもやあふと梅の花咲きしあたりにゆかぬ日ぞなき(伊勢集)
- ・ 山里に水あるところに客人のきたり — この宿にわれをとめなむ沢水に深き心のすみわたるべく(能宣集)
- ・ 山里なる女、鹿の音を聞て — 妻こふとしかなく時になりけりわがひとりねを誰に聞かせむ(忠見集)
- ・ 雪ふりたるところに女のながめしたるところ — 春やくる人やくるともまたれけりけさ山里の雪をながめて(赤染衛門集)

一首目は花見にでかけた時に垣間見た女性に再び会えるかと木の下に佇む貴公子を描いたもの。山荘に咲く梅の花を垣根の内と外で男女が眺めあう構図だったろう。二首目は涼しげな清水が一筋流れ、こちら側に立つ男から対岸の女性に歌を詠みかけたもの。川は天の川に見立てたものだろう。三首目は秋の夜に女性がひとり鹿の声を聞いている場面。おそらく萩の花に露が置き、空には有明の月がかかる情景だったろう。四首目は道も見えないほど降り積もる雪を女がながめやる場面で、男の訪れが絶えた女の悲劇的境遇を示す。いずれも四季の自然と恋が一つになった美しい場面である。山里が恋の舞台となったのはこのように山里が恋の様々な段階や様態を美しく演出してくれる自然に富んでいたからであろう。

山里はまた意外な出会いがある場所でもあった。都では深窓の女性が不用意に男性の視線にさ

らされることはないが、山里では花や月を眺めるために端近な場所に出ることもあったから、垣根の隙間などから垣間見られることもあったのである。

- ・山里なる家に、梅の花みる女ども侍りて、男かいまみし侍る ― わかやどの梅はときはに匂はなんひとめこひしと思はざるべく（恵慶集）

しかも、そうして出会った女性は鄙びた場所に不似合いな可憐な女性で、その驚きが出会いをいっそう心ときめくものにしていた。

- ・うち隠ろへつゝ、（注：佳人は）おほかめるかな。さるかたに見所ありぬべき女の、もの思はしき、うち忍びたる住みかも、山里めいたる隈などに、おのづから侍るべかめり（源氏物語、橋姫）
- ・やむごとくならずとも、父母もそはず、心ほそげにて、思ひもかけぬ山里、蓬、葎のなかに、かたち、ありさま、をかしからむ人を見いでては、そは品ほどをたづねえらるべきに侍らず、いみじう心ぐるしう、あはれに、さまことに思ひ侍りぬべし（夜の寝覚、巻1）

また山里は異郷的な場所だったから、出会いにもどこか不思議なところがあった。例えば『源氏物語』の明石は須磨の更に遠方の辺境の地で、しかも源氏がすさまじい暴風雨と落雷・火災という受難を潜り抜けて到達した世界である。だから「向こう側の世界」、異郷と言ってよいが、源氏はここで海竜王の娘に喩えられる明石の君と出会っている。北山の場合は京に近いが、急な九十九折りの山道を越えて行った山中で、奥深く入って行くにつれ霞が棚引きはじめ、京では既に散ってしまった桜が咲き誇っていた。まさに別世界のように、源氏はここで紫の君と出会っている。

こうして始まった恋だが、多くは人目を忍ぶ恋だった。そこで男は女を山里に隠しすえたまま密かに通うことになる。浮舟を見染めた薫も「人の知るまじき住み所」（浮舟）を設けて通うつもりだった。山里は人目の稀な場所だったから密かな逢瀬の場所としては最適だったろう。

しかし人目を忍ぶ恋であれば男はしばしば通うわけにもいかず、次第に訪れは間遠になり、ついには絶えてしまう。ところがこうした悲劇的な恋が憧憬されていた。

- ・浮舟の女君のやうに、山里にかくしすへられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを時々まち見などこそせめとばかり思ひつゞけ、あらまし事にもおぼへけり。（更科日記）

それはこのような恋が「あはれ」深く美しい恋とされていたからで、屏風絵でも繰り返し描かれていた。

- ・心ほそげなる山里に女のながめたるを人の見れば ― 木の葉ちりさびしさまさる山里におとなふものは峯の松風（源兼澄集）
- ・山里なる女 鹿の音を聞きて ― つまこふとしか鳴くときになりけりわがひとりねをたれに聞かせむ（たゝ見集）
- ・山里なる女の つらつえをつきて人待つかた描きて侍りしところに ― すみしれる月と見つ

るにこととは人待つ宵のあきの山風(源兼澄集)

要するに山里の恋には自然美に演出された美しさ、出会いの意外性、神秘性、秘密性、「あはれ」深さといった恋物語に欠かせない魅力が揃っていた。それゆえ山里は恋の理想的な舞台となっていたのであろう。

しかし現実はどうだったか。女性たちは実は物語のような恋より清少納言が「ゑせ幸い」(枕草子、21段)と軽蔑したような、親の言いなりに結婚し、夫や子に尽くすだけの平凡な生活の方を望んでいた。また男たちの結婚相手の選び方も極めて現実的・打算的なものだった¹¹⁾。つまり恋に関して現実にはあまりに退屈だった。だから山里が恋の舞台となることは実際にはなかっただろう。しかし一方で女性たちはそうした空虚を埋めるべく、現実にはありそうもない恋物語を創作し、その中で遊んだ。そのことによって束の間ではあっても退屈な現実から解放されたのだろう。

11. 修 道

貴族たちが山里へ出かけたのは山寺での仏道修行のためでもあった。

この山寺は俗界を隔つ幽閑の地にあり、山水の風景に優れていた。

・風光に歩を引かれて蕭寺に至りぬ 寺避かり境幽にして俗塵を隔つ(本朝無題詩、勝応弥陀院即時、藤原通憲)

・禅庭の深き処 塵寰を隔て 尽日眸を廻らせば 眺望閑なり 断峡虹は横たふ 春雨の後 遠村 煙は細し 夕陽の間 風来りて 砌を払ふは 唯だ花樹のみ 晴至りて 楼に入るは 幾碧山ぞ(本朝無題詩、初冬遍照寺即事、藤原実範)

そのため山寺はまるで仙境のようで、ここに居ると世間の煩わしさや栄華への思いなど消え去ってしまうという。

・梵宇本より無し塵滓の事 法筵に唯有るは薜蘿の僧のみ 忽ちに煩想銷えて 夏も還りて冷やかに 去らむとして掩留すること暫くも能はず(文華秀麗集、梵釋寺に過ぎる、嵯峨天皇)

・何に因てか遠く覓めん蓬瀛の地 象外の勝形は此の処に看ん(本朝無題詩、夏日大覚寺即事、藤原明衡)

・眼は迷ふ 洞裏の煙霞の色 心は忘る 人間の毀誉の声 此の処に優遊して機累断ちたれば 何為れぞ強ひて慕はん 浮榮を有(オサ)めんことを(本朝無題詩、春日遊寺、藤原敦宗)

だから山里は仏道修行にとって格好の場所であり、貴族たちはそこで空を觀じ、あらゆる迷いの根源——執らわれの心から自由になろうとした。

・塵慮洗ひ来る波潔き水 空觀催し得たり葉零つる林 漸く浄界の風煙の興に乗じ 暫く俗寰の名利の心を忘れたり(本朝無題詩、詣石山寺有感、藤原茂明)

・且つ開き且つ落つるは仮に非ざると雖も 一色一香即是空 老いを迎えて蹉跎たり双鬢の雪花をし見れば染著(シ)みぬ 九春の風(本朝無題詩、長楽寺花下即事、大江佐国)

次の詩も深い山中の寺で無心の石や一片の雲のように空を觀じ、身世を忘れたという。

・上方の来往 路尋ね難し 塔廟 青山 祇樹の林 片石空を觀ず 何れの劫か尽くる 孤雲
境に対す 幾年か深き 紗燈点点たり 千峯の夕 月磬寥寥たり 五夜の心 此に到り 能
く身世を忘れしむ 塵機 更に相侵すこと得ず（経国集、賦して「深山寺」を得たり、太上天皇の制に应ず、惟良春道）¹³⁾

要するに山寺はあらゆる苦悩の根本である執着心や束縛から解放される真の解脱の場所だった。

他方、山寺は浄土からの迎えを待つ場所、あるいは浄土へ向かう門のような場所でもあった。

・秋の寺は四望すれば俗境に非ず 西方は九品にして仙門と化せり（本朝無題詩、秋日遊雲居寺、藤原周光）

・阿弥陀の嶺の幽棲の地 月は佳期に属り 明也明なり 西に望む山僧は独り晴れたるを喜ぶ
袖に満ちて乾かず 観念の涙 一生儉かに待たん 紫雲の迎へ（本朝無題詩、山家翫月、釈蓮禪）

・禪樹の枝は低れて 松偃蹇たり 清泉の石は浅くして 水潺湲たり 今 円覚の勝形の境に
来り 念仏して遥かに期す 九品の蓮（本朝無題詩、春日円覚寺即事、菅原在良）

つまり山寺は単に苦悩から解放されるだけでなく、憂き世（穢土）そのものからも解放される場所だった。

本稿のまとめ

平安時代は宿世観が支配的な時代だった。政治的にも行き詰った時代で、権力は摂関一流に独占され、中下級貴族たちは学問や才覚を生かしようもない家柄社会に前途への希望を失っていた。山里はこうした身動きのとれない閉塞的な時代を生きる貴族たちが見出した一時の避難所であった。すなわち山里は、自然美・音楽・田舎暮らし・閑居・恋・修道によって、住みにくい現実から別世界へと解放してくれる場所だった。次稿では山里の建築や庭がそうした場所に相応しい造りになっていたことを見てみたい。

注

- 1) 小野恭平：平安時代の山里（山莊）について ― その（1）山里のイメージ・風景・四季・眺望（『学園論集』第166号、北海学園大学学術研究会、2015年12月）
- 2) 梅野きみ子：『えんとその周辺』第6章「めづらし」「めづらか」考（笠間書院、1979年）
- 3) 山口直子：「めづらし」考 ― 動詞「めづ」との関係から ―（『フェリス女学院大学日文学大学院紀要』第11号、2004年3月）
- 4) もっとも片野達郎氏は『日本文芸と絵画の相関性の研究』（笠間書院、1975年）で、源氏物語に登場する京洛を離れた海浜、山莊などの自然描写は何れも現地を観察したものではなく、倭絵屏風などから想を得たものだろうと指摘されている。
- 5) 新日本古典文学大系本では「なれば」とあるが、文意からは旧日本古典文学大系本のように「なれど」であろう。「川の辺りは危なっかしいが、（ついついそのことを酔いで忘れてしまい）一日中そこでお過ごしになる」という意味であろう。

- 6) 木村紀子：古代日本語の「あそぶ」(『奈良大学紀要』13, 1984年12月)
- 7) 高橋文二：遊びのことば(『古代文学講座』7 勉誠社, 1994年)
- 8) 八条は京の内だが、『夜の寝覚』物語の女主人公が男主人公と出会う九条の辺りが「山里めかしくおもしろき所」とされているから、当時は八条の辺りも稲田が広がる山里めいた場所だったのではなかろうか。
- 9) カイヨワの言う「ミミクリー」の遊びである。
- 10) 小林昇氏は『中国・日本における歴史観と隠逸思想』後篇「遁世と遁世者」(早稲田大学出版部, 1983年)で「わが国では隠逸は思想の上で知られたに過ぎなかった」と述べられている。
- 11) 『宇津保物語』(嵯峨院)に「今の世の男は、先づ人(注：妻)を得んとては『ともかくも、父母はありや、家所は有りや。洗はひ、綻びはしつべしや。供の人に物はくれ、馬、牛は飼ひてんや。』と問ひ聞き、容貌清らにて、貴にらうらうしき人といへども、荒れたる所に、かすかなる住まひなどして、さうざうしげ(注：貧しげ)なるを見ては、『あな、むくつけ。我が労き煩ひとならん』と思ひ惑ひて、あたりの土をだに踏まず。」とある。
- 13) 小島憲之：『国風暗黒時代の文学』中(下)Ⅱ(塙書房, 1986年)